

◎渡しわたしの月夜 岩代 服部すゐせん子

風一陣、枯蘆おのゝ戦いくさいて、今白雲を分け出た月に、櫓ろの音低ふすべり行く舟の波に漂ふ金波、銀波。

と、また月は薄墨雲の影に隠れた。

下宿しもぢくの家々の灯チラ／＼、渡し小屋の影から見えて、川柳かはやなぎ續つづきの土堤どてを、小股こまたに走り来るは誰ぞ。月は益々雲の奥深う。

「ヨイシヨツ、ヨイシヨツ」

ギイと舟を岸に着けて、ホツと一息。疲れし腕かいなを摩さする女渡し守。

ハタ／＼と土堤に音して、やがてヒラリ！舟は左右に、波は前後に。

愕然やうぜんたりし渡し守は、今漸く半面を現した月の光に、踞うづくまれる舟の人を透し見て、驚き聲。

「ヤ新屋のお浪様か」

「マア／＼此夜更に、何處へ往かつしやる、新屋の御新造しんぞうともあろう者が、お一人でそしてまア裸足はだしとは如何どうした譯わけでござんすか、新様しんさまと言争いさひでもさつしやつたか」

問はれてつまる胸を押へて、恥かしさう。

「いえ、あの私一寸家まで……おなをどん早く遣つてお呉れよう」

無邪氣あどけない言葉に、容子やうすお可笑かしと危ぶみながらも、

女は櫓を取りあげた。

「そんなら大事ござんせんか」

漕こぎ出づる舟、緑みどりりの小波さなみを蹴きて、無言の二人を河風かはかぜ緩ゆるふ吹く。兎餅もち搗つく、月の世界は、又黒雲を拂はらひ退のけ

て、一點の汚れなき青空に、今度こそはと光を放つて居る。見れば女渡し守。まだうら若き廿四五にちうしご、白の手拭あねさまひ姉様かぶりに、黒の筒袖か甲斐ひ々々しう、肉付き豊かの其頬に、月が照らして美しい、手拭てぬぐひ退のくれれば、束ねつか髪、ハラリ／＼と張りたる肩に。

突然しづかさ静寂を破る柏手かしはでの音。

「お月様！どうぞ／＼戦地の權ごんさんに變りがない様にお願もうひ申もうまする……」

小瀬こぜの渡しのだゞ中に、舟は動かず、波立たず、月の光りのたゞ皓々こうく。

「お浪様。家の權さんが出征のぼつてもう丸一年。早いものでござんすのう、私しやそれからこうして女船頭、亭主の握かちつた舵を取つて、盲目めくらの姑おつかさんを養つて居りましたが、毎晩此處で、こうして、お月様を拝をむんでござんする」

凜りんと冴さえたる其言葉に、お浪の胸にはヒヤリと。

上宿かみやどの舊家きゆうか、笹川に生れたお浪十八。下宿しもぢくきつての好男子、新屋の新造に望まれて、遂此正月に芽出度い三三九度。可愛いお雛様のやうなご夫婦と、村の若者、娘達の羨うらやみの種となつて居るが、何を言ふにも笹川の

一人娘、可愛い／＼で育つただけに、新屋の御新造とも仰がれる身が、日毎々々の仕事と言へば、父が京土産の人形の着物縫ひ、そしては物堅い姑しゅうとめをあきれさせて居たが、お嬢様育ちのあけてまだ十八、鬘は結ふても強すねるがお上手。今日も今日とて姑おつかさんに少々小言を言はれたのが口惜しいって、新様の膝に顔押し當あててのそり泣き。まア／＼となだめられるを、私しやもうこんな家いや／＼いやと、強すねて泣いて、慰め兼た新様が、そんな勝手におしと、わざと起たち去つたを、怨うらめしそうに後見送あとつて、まあ新様までが：：：いゝわ／＼家うちに歸つて母様に言ひつけてと、裏口から抜け出して來た今のこと。

月にのぞかれる様な氣持ちして、
「イヤ！」とばかり長き袂たもとに顔を覆ふた。赤い襦袢じゆばんの袖がもつれて出て、クツキリと白い襟に丸鬘まげのくづれが、落ち入りそう。

あゝ今更ながら：：：新様戀しう：：：

「あのうおなどん！舟を戻してお呉れな！」

川面かはもを渡る風サラ／＼、小波靜さじんあみに、月はいよゝ光を増して：：：と

向ふの土堤に現はれた、提灯二ツ：：：また一ツ：：

【入力者注】底本は総ルビですが、入力者の判断

で一部のみ残しました。

以下の修正を施しました。

12下 20 挖↓舵

底本…「女子文壇」明治三十九(1906)年第貳卷第七號

テキスト入力…小林 徹

公開…令和三年三月九日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)